［要旨］

教育の社会資本形成機能―理論と実証

荒井　一博
松塚ゆかり
山本　宏樹

本稿の目的は、教育が社会資本（social capital 社会関係資本）の形成にどのような影響を与えるかを解明することである。社会資本の形成要因に関する先行研究は乏しい。そのため本稿では、学校教育・家庭教育・社会教育を網羅する形で分析を行った。分析対象はウェブ・アンケート・システムを通して回答を寄せた21歳から65歳までの3694名である。

分析では、個人の社会資本量を表す変数とみなしうる「社会貢献意識」を主成分分析によって合成し、それを被説明変数とする29の重回帰モデルを検討した。その結果、特に強い効力をもって社会貢献意識を高める変数として、中学校時代に教え合った経験、社会科を得意科目としたこと、先生のような人になりたいと思ったこと、先生に暖かく接してもらった体験、善悪や道徳について厳しかった親や親せきの存在、困っているときに助けてくれると確信できる人間が多いこと、頻繁に連絡をとり合う学校時代の友人が多いこと、などが析出された。

総じて、家庭環境や両親に備わる属性などの効果が弱く、学校教育や社会環境という後天的に設定される過程のなかで多くの社会貢献意識が形成されることが判明した。これは社会資本が教育を中心とした社会制度により形成・蓄積されうることを意味する。